

名義抄における切字反切をめぐって

山田 健三

キーワード：名義抄、切字反切、広益玉篇、改編

1 はじめに

本稿の内容は、山田（1998）の続編にあたる。

山田（1998）では、名義抄に見える切字反切（「〇〇切」という反切形式）の典拠文献として、確実に比定される場所では、図書寮本では、広益玉篇、広韻が、改編本では、加えて、分毫字弁、集韻系韻書があることを指摘した。

中国の古辞書に於いては、反字反切（「〇〇反」という反切形式）から切字反切への全面的な変更という歴史的経緯があり、同一文献に両者が混在することは、版本を見る限り、基本的にないと思われるが¹、日本の古辞書では、両者が混在することは珍しくない。日本の古辞書におけるこのような状況は、典拠文献からの忠実な引き写しの結果であり、反字反切か切字反切かは、択一的な問題ではなかった、と一応考えられそうである。

しかし、「択一的な問題ではなかった」とする論拠を、両者の混在という事実のみに還元するならば、説明不足であろう。反字反切にしろ、切字反切にしろ、帰納される音の異なりは全くないので、音情報の再現という意味では、両者を区別するのは、全く無駄である。図書寮本のような出典を明記するものならばまだしも、改編本のような、出典を示さないものに於いてさえも、両者を区別しているのは何故か。中国における反字反切から切字反切への変更という流れは、諸の韻書・字書資料を見れば容易に了解できたであろうから、その流れに沿って、全て切字反切に切り替えることに問題があるとは思えない。

事実として、「両者を区別して、忠実に引き写してある」ことと、その意味を問うことは別である。本稿は、名義抄編者が「両者を区別して、忠実に引き写しておいた」ことの積極的な意味を考えようとするものである。

2 引用文献からの引用内容

まず、改編本に見える切字反切の数を、その典拠ごとに示す。切字反切の引用文献から引用された部分が、反切注部分だけか、義注も含めてか、という点に注目して整理してみると、以下のようになる。

¹宋本玉篇（宮内庁書陵部蔵本）のように、玉篇本文は切字反切、付録の分毫字様は反字反切、といった本文と付録の間で反切形式が異なる例はある。

	反切のみの引用	反切と義注（一部もしくは全部）の引用	計
広韻	6	2	8
集韻系韻書	2		2
広韻もしくは広益玉篇	1		1
広益玉篇	12	31	43
分毫字弁		2	2

ここからは、韻書（広韻・集韻系韻書）は反切注のみの利用が多く、字書・字様（広益玉篇²・分毫字弁）は反切注と義注の双方が利用されている、という傾向が明瞭に読み取れる。

およそ字書に於いて必要不可欠な情報は、見出字に対する音情報（音注）と意味情報（義注・和訓）である。字体情報は、見出字が異体字を持たない場合は当然不要であり、また異体字を持っていたとしても義務的に必要な情報とは言えないので、オプションな情報である³。当該諸例の注文内容は、事実上、必要不可欠な情報全てを字書に求め、韻書には音情報のみを求めている、と言ってよいだろう。このことは、字書と韻書の利用レベルが異なっていることを物語っている。韻書に音情報を求めるのは、韻書の特質からして理解しやすいが、字書にも音情報を求めているのは、音情報に関して、字書でも韻書でもよい、ということではおそらくなく、字書には、音情報も意味情報も含めての情報、つまり掲出字そのものの選択が求められていたことを示唆する。

名義抄の掲出字配列に、類似字形配列が見られることは周知の通りであるが、この配列は機能的には、当然検索の便と関わっている、と思われる。名義抄の改編過程には、掲出字そのものの増補があったと見られるが、その際、掲出字の配列順の変更も当然なされただろう。そういった掲出字選択や配列の変更は編者（改訂者）の考え・方針に従って行われたであろうが、掲出字そのものを増補する基準は、何によったのだろうか。

図書寮本と観智院本を見比べてみても判るが、改編本における掲出字の増補は著しい。図書寮本の注文が極めて詳細であるのに対し、改編本のそれが極めて簡素になっているのは、従來說かれるように利用目的・利用層の異なりを示すのかも知れないが⁴、改編本における注文の簡素化は、掲出字増補との引き換え、と見ることもできそうである。

3 図書寮本と改編本系諸本との間に見られる切字反切の異なり

さて、図書寮本に見られる切字反切と、改編本諸本に見られる切字反切とを対照させて、そこから見える問題を検討してみたい。

整理した結果を先に示すならば、次の三通りが確認できる。

²本稿では、大広益会玉篇という呼称をとらず、広益玉篇という呼称に統一している。これは図書寮本名義抄等に見られる呼称に従ったまでである。大広益会玉篇と区別すべきだという議論もあろうが、玉篇諸本論そのものに立ち入らない本稿では、名義抄編纂当時の呼称に従っておく。

³むろん、字体情報は、関係する異体字を字書が既に見出字として持っている場合は、参照注としての機能も果たし、それによって事実上、音情報・意味情報も検索しうるわけであるから、包括的な情報表示でもあり得る。

⁴この点について、通説とは異なる解釈を持っているが、これについては別に述べる機会を持ちたい。

1. 図書寮本の切字反切がそのまま改編本にも見られるもの
2. 図書寮本の切字反切が改編本において見られないもの
3. 図書寮本に切字反切はないが、改編本において見られるもの

以下、それぞれの全例を示す。

3.1 図書寮本の切字反切がそのまま改編本に見られるもの

以下の記事は、図書寮本の記事がそのまま改編本にも見られるものである。

1. 濡

【図書寮本】廣云一儒、真云濕也、玉云潤濟也、宋云乃官切、水名、吳一公云儒…。(23-2)

【観智院本】儒一、又乃官切、水名。(法上3オ7、水部)

【蓮成院本】儒一、又乃官切、水名。(中一2オ5、水部)

2. 漉

【図書寮本】上、益云方買切、水。(56-1)

【観智院本】方買反。(法上23オ8、水部)

【蓮成院本】方買切。(中一23オ5、水部)

3. 漚

【図書寮本】益云莫筆切、流泉。(59-3)

【観智院本】莫切、流泉。(法上23ウ1、水部)

【蓮成院本】莫筆切、流泉。(中一23オ5、水部)

4. 湔

【図書寮本】廣云五斬切、澗謂之一、滓澗也。(234-3、土部)

【観智院本】五斬切、澗。(法中31オ5、土部)

5. 壕

【図書寮本】廣云胡高切、城一。(234-3、土部)

【観智院本】胡高切、城一。(法中35オ2、土部)

6. 伶

【図書寮本】廣云力丁切、心了也。(255-5、心部)

【観智院本】一蓮…又魯丁切、心了。(法中45オ5、心部)⁵

7. 帛

【図書寮本】益云徒戴切。(285-3、巾部)

【観智院本】(帟) 徒戴反、フクロ。(法中56オ7、巾部。見出し字は誤写か) / 一^フ門、フクロ。(仏上10オ4、人部)

【蓮成院本】(巾部欠) / 一同、フクロ。(上一4ウ7、人部)

⁵反切上字の異なりについては、宋本玉篇の記事が観智院本に一致することからして、図書寮本の誤りの可能性が考えられる。cf. 山田 (1998)。

例7については、観智院本の見出字「帛」は、その音注・和訓からみて、「帛」の誤写であることはおそらく間違いなく、その反切注「徒戴反」に関しても、「徒戴切」の誤写と思われる。

これらは、名義抄の改編作業の過程に於いて、そのまま残されたものと見てよいだろう。但し、これらが積極的に残されたのか、消極的な意味で残ってしまっているのかについては、後で考えることとする。

3.2 図書寮本の切字反切が改編本において見られないもの

図書寮本の切字反切が改編本において見られないものは次の例である。

図書寮本は法部の半分ほどを残すのみであり、蓮成院本は、法部に該当する部分は、水・彡・言（部末は欠）の三部しか残存しておらず、西念寺本・高山寺本に至っては対応箇所を全て欠いている。よって、図書寮本と対照できるのは、観智院本と蓮成院本のみである。

1. 瀘

【図書寮本】益云力呉切、水名。（「瀘」類云慮一。）（56-6、水部）

【観智院本】（「瀘」力胡反、蜀水...）「瀘」正。...「瀘」一慮、瀝也。（法上7ウ8、水部）

【蓮成院本】「瀘」力胡反、蜀水...。「瀘」正。...「瀘」一慮、瀝也。（中一9ウ2～3、水部）

2. 一（凍）凍

【図書寮本】干云上谷、^{宋韻}唐韻云、上都弄切、水一、下得紅切、暴雨。（水部、66-2）

【観智院本】

（凍）一棟、又東^{宋韻}ホリ、...。（法上5ウ5、水部）

（凍）東凍二一、...通凍字...。（法上23ウ7、彡部）

【蓮成院本】

（凍）一棟、又東...。（中一4ウ7、水部）

（凍）東凍二一、...通凍。（中一24オ2、彡部）

3. 詔

【図書寮本】广云...・方云名正反、一目也...・廣云名聘切、一謔也。（87-6、言部）

【観智院本】名正反、一目也...。（法上37ウ3、言部）

【蓮成院本】（言部欠損部分にあったか）

4. 峯

【図書寮本】益云迪利切、古地字、類云則天時作此。（141-6、山部）

【観智院本】古地字、則天作。（法上62ウ3、山部）／則天作此。（法中25ウ4、土部）

5. 梯

【図書寮本】益云徒計切、孝一、又徒禮切、愷一。（259-2、心部）

【観智院本】...一弟。（法中49オ4、心部）

6. 慥（「慥」の注文中）

【図書寮本】益云恠徒各切 忠也正也又 池陌切恠^同_上—^同_上付一也懲也。(272-2、心部)

【観智院本】(懐恠)或付也…。(法中43オ8、心部)

7. (錯) 纒

【図書寮本】一廻…東云畫也、説文作繪織也…益云丘謂切紐一也…。(296-4、糸部)

【観智院本】古外反…。(法中59ウ2、糸部)

これらの例の相違を音注に注目して整理してみると、以下のようになる。

切字反切	→	反字反切	1、7
切字反切	→	直音注	2、5
切字反切	→	なし	3
切字反切	→	なし(音注なし)	4、6

さて、これらは改編のある段階で、変更されたと見られるものであろう。

例3については、別に「名正反」という反字反切があるので、音注不在になるわけではないが、例4、例6は、音注不在になってしまっている。これはいかなる理由によるのであろうか。先に述べたとおり、字書における必須情報は音情報と意味情報である、と考えられる。音情報が削られることは、それが誤まった情報でない限り、考えにくい。以下検討してみよう。

例4については、これは「地」の異体字(則天文字)である。「古地字」とあるから、音が不明になることはない。事実、名義抄内には「古○字」「俗○字」といった注文中で、音注を示さないものは多いので、こういった方式にならって、とりたてて音注を示すことをしていないと考えられる。つまり「古○字」「俗○字」という字体注自体が、他の異体字への参照注として働くので、事実上音注の役割をも担っていることになるからである。

例6については、まず見出が図書寮本と観智院本では異なる。図書寮本では単字見出であるが、観智院本では熟字見出である。更に、図書寮本に見える切字反切は、見出字の音注ではなく、その異体字である「恠」のものである。よって、観智院本において、音注が示されないのに何ら不審な点はない。

よって、注形式の変更に伴って音注が必要でなくなった例4、6も含め、切字反切の扱いが低いことが看取される。

3.3 図書寮本に切字反切はないが、改編本において見られるもの

次に、図書寮本に切字反切はないが、改編本において見られるものを見てみよう。まず、当然のことであるが、掲出字そのものが図書寮本に見られないもの、つまり改編過程における掲出字の増補と見られる例が次のようにある。

1. 得

- 【図書寮本】（当該字なし、水部）
 【観智院本】（音注なし、和訓のみ。法上23ウ3、水部）
 【蓮成院本】多則切…。(中一23ウ1、水部)
 【宋本玉篇】都勒切、水。(中79ウ5、水部) (元：280-7)
 【広 韻】多則切／又丁力切 (529-3)

2. 邦

- 【図書寮本】（当該字なし、邑部）
 【観智院本】補江切、大曰邦小曰國亦界也。(法中20オ6、邑部)
 【宋本玉篇】補江切、周禮太宰六典以佐王治邦國、鄭玄云大曰邦小曰國亦界也。(上19ウ4、邑部)
 【広 韻】國也、又姓、出何氏姓苑、博江切…。(39-5)

3. 悖

- 【図書寮本】（当該字なし、心部）
 【観智院本】力刃切、鄙也、俗作悖。(法中38ウ3、心部)
 【宋本玉篇】力刃切、鄙也、俗作悖。(上79ウ5、心部)
 【広 韻】（「遘」…良刃切…）…「悖」鄙、悖本又作吝。(392-7)

最初の例については、蓮成院本のみ切字反切が見られる。観智院本の脱落か、または、改編諸段階の最後の方で、蓮成院本（祖本）のみに加えられたものか、俄かには判らない。

後の2例は、広益玉篇からの引用である。蓮成院本の対照箇所は欠損部分である。この2例については、注文に広益玉篇記載記事以外の情報（和訓など）を全く持っていないので、掲出字の増補そのものが、広益玉篇によって行われた可能性を示唆する。

これら3例は、どれも図書寮本に見られない掲出字であり、掲出字自体が改編過程で増補されたものと見てよいだろう。

さて、次の3例は、やや問題が複雑そうである。

1. 潑

- 【図書寮本】一撥、飭云水潑湯曰一、ソ、ク集。(59-3)
 【観智院本】ソ、ク、イル、一水、蒲末切、水漏也。(法上23ウ1、水部)
 【蓮成院本】ソ、ク、イル、一水。(音注なし。中一23オ6、水部)
 【宋本玉篇】蒲末切、水漏也。(中79ウ5、水部)
 【広 韻】（当該字なし）

2. 疏

- 【図書寮本】干云上通、本草補遺云一諸、中云所據反、識也、案識券一記識之也、昏云券一即契約也、广云山於反、一通也、説文𠄎〃窓也、字彳疋足也、彳四象其形也、門戸窗牖皆所以引通諸物故与疋〃取通行意也、東云親一也希也、ソ、不親通也、分條之也、除也、通闕也、國分也、然云、通意之辭也、亦記也、又疎一、即一通一条一鍤

⁹ 図書寮本原文の当該箇所は、虫損によって読めない部分があるが、引用文献と照合し復元しうる部分は出来る限り復元した。

也。(119-1)⁶

【観智院本】所蒞切、通也、除也、分也、遠也、窓也、又姓、俗作踈、又所助切。(法上46オ8、足部)

【宋本玉篇】所居切、稀也、闊也、遠也、通也、理也、分也、非親也、亦所去切、檢書也。(下76オ10、去部530)

【広 韻】通也、除也、分也、遠也、窓也、又姓、漢有太子太傅東海疏廣、或作疐、俗作踈、所蒞切、又所助切...(69-3) / 記也、亦作踈、所去切...(362-7)

3. 慙慙

【図書寮本】弘云都絳反、愚也、广云癡也、声類韵集一丑巷反、愚癡也、一愚鈍也、無知專愚曰...愚無所知也、亦鈍也、頑黯也、東云^{又六}慙一。(247-7、心部) / 广云貪飡無劑畔味著無厭足於苦中如駝食蜜也、新經論類為耽嗜者是。(248-1、心部)

【観智院本】入、陟絳切、玉云愚慙也。(全て朱筆。法中48オ1、心部)

【宋本玉篇】(慙) 陟絳切、愚慙。(慙) 同上。(上82オ1、心部)

【広 韻】(「拱」...呼貢切...)(慙) 慙癡愚人。(344-4) / (慙) 愚也、陟降切。(345-9)

これらの例をそれぞれ検討して行く前に、原撰本から改編本へという流れにおける「注文の改編」という作業自体について、具体的に考えておきたい。

字書の改編作業に於いては、掲出字レベルでは、各字の配列・所属の変更といった枠組みの変更・修正が、また、掲出字そのものの〈増補〉・〈削除〉・〈訂正〉が考えられる。しかし、注文(音注、義注、字体注)のレベルでは、〈新登載〉・〈増補〉・〈訂正〉・〈簡素化〉といったことは考えられるが、特別に誤りがない限り〈削除〉は考え難い。今、例えば、音注だけについて話をするならば、注音方式には、反切注、直音注、カナ音注、などがあり、必要に応じて、その注音方式を変更することはあるかも知れないが、音注そのものを削除し、なくしてしまうことは考え難い。もちろんその音注自体が誤りであるような場合は別であるが、原則として音注は必須要素である、と考える。もちろん名義抄中にも、音注のない掲出字が少なからずあることは承知しているが、多くは異体字注の存在等によって音注自体がカバーされるケースであり、その他はおそらく適切な音注が得られていない状況を反映していると思われる。こういった予想は、他の注についても原則として同様に当てはまると考える。

以上の仮説に基づいて、1～3の例を検討する。

まず、1から。

音注	一撥	→	蒲末切	(注音方式の変更)
義注	水浚湯曰一	→	一水、水漏也	(全面的変更)
和訓	ソ、ク	→	ソ、ク、イル	(増補)

図書寮本記事と観智院本記事との間に、当該記事そのもののレベルで、直接の改編関係を認めるとすると、元の記事を生かしているのは和訓だけということになり、音注・義注に關

しては、差し替えが行われたことになる。となると、その差し替えの理由が知りたいところであるが、特別に元の注の不備・欠を補ったとも思われぬ。ただ音注については、図書寮本に示された音注が、典拠を示さない直音注なので、典拠のない音注を削ったと考える可能性もあろう。しかし、典拠ある義注をも削っているので、典拠の有無が削除のキーとして働いていたとは思えない。むしろ注目したいのは、観智院本が引用する広益玉篇からの記事「蒲末切、水漏也」が注文の最後にあることと、蓮成院本がこの部分を持たないこと、この2点を考えると、観智院本のみに見える「蒲末切、水漏也」は、恐らく観智院本（もしくは観智院本祖本、また観智院本祖本段階の改編本）独自の増補記事と見るべきで、現存改編本諸本を覆う記事ではないであろう。しかも改編を行う前段階では音注を持たない注文であったのではないかと考えられてくる。つまり、観智院本や蓮成院本の改編作業が施された原撰本は、図書寮本のような注（少なくとも音注）は持たないものであったか、当該の掲出字そのものを持っていなかった可能性が考えられる。つまり、図書寮本のような記事に対する批判的継承とは考えにくい。

次に2および3の例であるが、これは音注だけを見るならば、反字反切を切字反切に替えたように見えるが、実は、音注のみならず注文そのものが全面的に異なっている。両例とも、注文は図書寮本・観智院本ともかなり長いものであるが、比較してはっきり判る通り、2は広韻からの、3は広益玉篇からの引用であることは、明白である。図書寮本のかかなり詳しい注を抄略して登載した形跡は全く窺えない。これも直接の改編関係を想定すると、原撰本の注文記事を全く無視して、新たに広韻・広益玉篇から音注も含めて注文を採用し全面的に差し替えた、と解釈することになるが、そのような解釈が成立する蓋然性は低いと思われる。先に仮説として述べたように、注文に特別に誤りがない限り（削除）は考え難い。改編本における改編の支柱に簡素化があることは一目瞭然であるが、当該例に於いては、図書寮本がこれだけの長文の注文を有しながら、そこに改編本に継承された痕跡が全く見えないのは、直接の関係を考える限り不可解である。これもおそらくは原撰本の注文を無視したと見るより、観智院本（祖本）が依った原撰本には、注文もしくは見出字そのものがなかったと見た方が合理的に説明が付きそうである。例2、3については改編本諸本の内、観智院本しか存在しない箇所であるので、これが観智院本独自のものか、改編本諸本に共通するものなのかは不明であるが、例3については、全て朱筆で書かれており、かなり後の改編段階で、観智院本が独自に書き加えたようにも思える。

ここで原撰本に「注文がなかった」というのは、改編本が依拠した原撰本に於ける脱落の可能性も含めての意味であるが、結局これらの例から判ることは、現存唯一の原撰本系名義抄である図書寮本と、現存改編本諸本との間に、少なくとも全面的には直接の関係を認めることはできず、別の原撰本系テキストの存在を仮定する必要があることである。

以上、図書寮本と改編本系諸本との間に見られる切字反切の異なり三通りを検討してきたが、検討の結果次のことが明らかになった。

1. 図書寮本の切字反切がそのまま改編本に継承されているものがある。
2. 図書寮本の切字反切を別の音注形式（反字反切、直音注）に変更したり、削除したりしているものがある。

3. 図書寮本に見られない見出字、つまり改編本における増補字の注に、広益玉篇や広韻が用いられている。
4. 図書寮本の注文がかなり長文であるにも関わらず、一切改編本に継承されていないものがある。これは具体的な系統の上で、両者の間に直接の関係が認められないことを示していると考えられ、現存改編本（特に観智院本）が依った図書寮本とは異なる別の原撰本系テキストを想定する必要がある。

ここから、広益玉篇や広韻の利用には、原撰本段階での利用と、改編本段階での利用とがあることが明確に読み取れる。

4 改編本系諸本の間に見られる切字反切の現れの違い

次に、改編本諸本間の異同に注目してみる。観智院本は完本であるが、西念寺本・高山寺本・蓮成院本は零本であるので、観智院本を含めて二本以上存在している箇所についての考察する。よって、観智院本一本しか存在しない箇所は示さず、また用例は、前稿（山田、1998）の用例番号によって示し、出典はカッコ内に略称で示す。（玉＝広益玉篇、広＝広韻、分＝分毫字弁、集＝集韻系韻書）

1. 四本が対照できる部分

- (a) 高山寺本のみにある：1(玉)
- (b) 観智院本のみにある：5(玉)
- (c) 蓮成院本のみにある：7(広)
- (d) 観智院本と西念寺本のみにある：6(玉)
- (e) 高山寺本と観智院本と西念寺本のみにある：2(玉)、3(玉)

2. 三本が対照できる部分

- (a) 西念寺本のみにある：4(玉)
- (b) 観智院本のみにある：10(玉)、11(広)
- (c) 蓮成院本のみにある：8(広)
- (d) 三本すべてにある：9(玉)、12(玉)

3. 二本が対照できる部分

- (a) 観智院本のみにある：20(玉)、22(広)、37(集)、39(玉)、49(玉)、50(玉)、51(集)、52(分)、53(分)、54(玉)、55(広)
- (b) 蓮成院本のみにある：21(広)、36(玉)、38(玉 or 広)、41(玉)、43(玉)、46(玉)
- (c) 観智院本と蓮成院本にある：17(広)、18(玉)、19(玉)、35(玉)、40(玉)、44(玉)、45(玉)、47(玉)、48(玉)

ここからまず読み取れることは、分毫字弁・集韻系韻書からの引用は観智院本にしか見られないこと、また広く二本以上に見られる切字反切は、殆ど全てが広益玉篇からのものであること（1-(d)(e)、2-(d)、3-(c)）、である。

この、改編本諸本間に見られる引用文献の異なりは、そのまま改編段階の異なりを反映している可能性がある。つまり、原撰本の段階、もしくは改編の初段階では広益玉篇が用いられ、次の段階で更に、広益玉篇・広韻が用いられ、また集韻系韻書・分毫字弁が用いられた。そのような状況を反映しているように思われる。

但し、集韻系韻書を除けば、広益玉篇、広韻、分毫字弁もしくは分毫字様（唐韻所載か？ cf. 山田(1998)）は、原撰本で既に用いられている文献であるから、改編作業は必ずしも原撰本で用いられていない新しい文献による記事の増補・訂正ということだけではなく、これらの文献が繰り返し用いられたことを物語っていると考えられる。このことは、写本文献の未完成性に関係することであろう。特に引用回数の多い広益玉篇の利用は、当時の日本に於ける広益玉篇の価値を考える上で注目すべきである。

5 名義抄における切字反切の意味—まとめにかえて—

以上、名義抄に見られる切字反切をめぐって、具体例を連ね、いくつかの問題について検討を加えてきたが、以下まとめて示す。

名義抄の原撰本から改編本への改編段階と広益玉篇・広韻との関係について次のような考察を見た。

図書寮本に明らかなように、原撰本の段階で、既に広益玉篇・広韻は用いられていた。そして、そこに示された切字反切の改編本諸本での行方を見ると、そのまま継承されたものもあるが(4.1)、他の音注形式(反字反切、直音注)に変更されるなどしているものもある(4.2)。切字反切が、別の切字反切に替えられている事実のないことを盾に取って言えば、切字反切の扱いは随分軽いものに思われ、これは、おそらくそのまま広益玉篇・広韻の音注に対する扱いの軽さと見てよいだろう。しかるに一方、改編の諸段階では、これら広益玉篇・広韻(特に広益玉篇)が、掲出字・注文の増補などに用いられている(4.3)。このことは、一見矛盾しているように見えるが、統一的に解釈するならば、名義抄の原撰本から改編本への諸段階に於いて、掲出字選択に広益玉篇(・広韻)を利用し、ひとまずそれらの注文も必要箇所収めるが、名義抄撰者たちにとって、より適当な注文があれば差し替えていく、といった作業が繰り返し行われた結果と見ることができそうである。つまり掲出字選択レベルでの利用と注文選択レベルでの利用は分けて考えられる。とすれば、改編本に原撰本からそのまま流入していると思われる例は、いまだ適当な注文が得られていない状態であるのかも知れない。写本に於ける継承とは、本質的に未完成である。

さて、前稿(山田,1998)で問いとして提示した「何故、反切形式を一方に統一しなかったのか」に対して、本稿での検討の結果、次のような答えが用意される。

切字反切の多くは、広益玉篇からの引用であり、それは、切字反切によってそれとわかるものであった。広益玉篇の利用は、音注の引用というよりも、3.3で見たように、掲出字そのものの選択に関わっており、音注の利用は暫定的なものであったと考えられる。「潑」のように後に音注・義注が広益玉篇によって加えられた(観智院本)と見るべき例も若干存在するが、多くの切字反切は、当該字の音を示しつつも、当該字の音注の出自が広益玉篇や広韻からのものであることのマーカーとして機能しており、いずれ、より適当な音注によって

替えられるべきものとして存在価値を有しているように思われる。これは、観智院本のみに残る凡例の最後の「不知所追々可決之」（知らざる所は追々これを決すべし）という文言一むろんこれはあらゆる情報の欠落部分についての言と見られるが一も対応させて考えることが可能であろう。

なお、山田（1997）で、名義抄編纂における掲出字選択に、広益玉篇が目録的に利用された可能性を指摘したが、その推定に本稿の結論は矛盾しない。

使用複製テキスト

- 図書寮本類聚名義抄（『図書寮本類聚名義抄』勉誠社）
- 観智院本類聚名義抄（『類聚名義抄・観智院本』天理図書館善本叢書、八木書店）
- 西念寺本類聚名義抄（天理図書館所蔵本の紙焼写真版）
- 蓮成院本類聚名義抄（『鎮守国
神社蔵本三寶類聚名義抄』勉誠社）
- 高山寺本類聚名義抄（『和名類聚抄・三寶類字集』天理図書館善本叢書、八木書店）
- 広益玉篇宋本（宮内庁書陵部蔵本の紙焼写真版）
- 広益玉篇元本（建安鄭本）（『玉篇及原本残巻』藍燈）
- 大宋重修広韻（『校正宋本廣韻・附索引』藝文印書館（台北））
- 宋本集韻（北京図書館蔵宋刻本）（『宋刻集韻』中華書局（北京）1988）

引用文献

1. 山田健三（1996）奈良・平安時代の辞書 西崎亨編『日本古辞書を学ぶ人のために』世界思想社
2. 山田健三（1997）名義抄における部首検索システムの構築『愛知学院大学教養部紀要』44-4
3. 山田健三（1998）名義抄における切字反切の典拠『聖海学園女子短期大学
国文学科創設三十周年記念論文集一言語・文学・文化一』和泉書院

（校正に際しての付記）

3.3で、原撰本から改編本への継承において、改編本が原撰本の詳細な注を無視した可能性の低いことを述べたが、これは、改編段階で、原撰本の見出字と各情報（音・意味・字体）それぞれを同時に参照したとは限らないことを考慮に入れていない点で、浅慮であった。現存の図書寮本とは異なる原撰本の存在を仮定する前に、改編という行為において、原撰本がどのように利用されたかを、「原撰本／改編本」という呼称に惑わされず、one of themとして今一度見直す必要がある。広益玉篇が繰り返し利用された可能性を主張しながら、原撰本名義抄について、そういった可能性を頭から排除してしまっていたのは、無意識に「原撰本／改編本」という呼称にとらわれていたためである。幸い、この点は本稿の中心的な主張に大きく関わらず、むしろ筆者の考え方を補強するものであると考えるが、自らの問題意識として、余白を借りて一言しておく。